

子供は、教えれば変わる

— 礼儀正しさのDNAはまだ残っている —

田中日出男

— NPO法人マナーキッズ®
プロジェクト理事長

一「NPO法人マナーキッズ
プロジェクト」とは

(1) マナーキッズプロジェクトを立ち上げた
「思い」

① かつては、日本人は礼儀正しい、節度ある民族と
世界の人々から尊敬されていた

子供や若者の状況がおかしい。多くの人がそう感じ
るようになって、ずいぶん時間がたつ。挨拶や礼儀な

ど人間としての基本的なマナーやルールに欠ける。私
的空間と公的空間のけじめ感覚を持ち合わせない。傷
つのが怖いから他人と深く交わろうとしない。学び
を含めて何事にも意欲がわかない。

十六〜十九世紀、我が国を訪れた世界各国の人々は
日本人の礼儀正しさ、立ち居振舞いの素晴らしさに感
嘆の声をあげたとのことである。何故、このように変
わってしまったのだろうか。ここ百数十年の間に三回、
即ち、明治維新、敗戦、そしてバブル期、日本の伝統
的な良さを否定した当然の帰結という見方もある。わ

ずか百数十年の間に三回もその国の良さをなくしてしまつた国は他にないようである。

また、戦後の民主主義の教育を受けた世代があらゆる分野、あらゆる所において指導的役割を担う時代を迎えているが、子供の幼児期、児童期に「躰」「基本のマナー」という大事なことを家庭、幼稚園、学校、そして地域社会が戦後以来ずっとなおざりにしてきたこともマナーの乱れの一因ではないだろうか。

② 子供のマナー低下は先進国共通の悩み

しかし、子供のマナーの乱れは我が国だけではないようである。

このプロジェクトでは、文部科学大臣杯マナーキッズテニス全国小学生団体戦を三年間にわたって開催し、テニスの成績、マナー・ルールの順守度、感想文の内容、体力・運動能力テストの結果を総合評価して、一大会八人以内の小学生を「マナーキッズテニス大使」として、イギリス・ウィンブルドンに派遣、現地で国際交流活動を行っている。

マナーキッズテニス大使を英国に連れていき、そこで見聞したことは、子供のマナーの低下は、イギリス、フランス、アメリカ等、先進国はどこにおいても問題

二万六千人を超える幼稚園園児、小学生児童が参加した。十七都道府県七十小学校においては、体育・道徳関連授業に採用されている。

③ 平成十九年 NPO法人マナーキッズプロジェクト設立

マナーキッズテニス教室は、各地の小学校などの反応は極めてよく、例えば「挨拶をする子が増えた」「いじめを減らす効果が期待できそうだ」等の報告が寄せられている。

このような実績・効果などから、本プロジェクトの趣旨・内容をテニスだけでなく、スポーツの種目を超え、あるいはスポーツ以外の子供の活動団体等と連携・協力して、全面的に活動展開していきたいということから、平成十九年に有志で「NPO法人マナーキッズプロジェクト」を設立した（文部科学省後援）。以来、サッカー、ラグビー、ミニバスケット等スポーツの領域が広がっており、その参加者は九千人を超えている。

全国の幼稚園・小学校・総合型地域スポーツクラブ・スポーツ少年団などで、マナーキッズ教室を開催するほか、地域や保護者などを対象とした各種研修・

になっているようである。地域共同体の崩壊、宗教の影響力の低下等が原因のようである。

(2) マナーキッズプロジェクトの経緯

① 平成八年 早稲田大学庭球部小学生テニス教室が原点

平成八年頃、会社で人事労務の仕事をしていた関係から、従業員同士が挨拶しなくなった事に問題意識を持ち、「挨拶運動」を始めた。どうして挨拶ができないのかと思っていたところ、近くの小学校の校門で、先生と生徒が挨拶をせずに校門に入る姿を目撃し、小学校で挨拶する習慣がないのが原因ではないかと思つた。そこで、母校の早稲田大学庭球部で小学生テニス教室を開始したのがきっかけである。

② 平成十七年 財団法人日本テニス協会マナーキッズプロジェクト開始

平成十七年四月に財団法人日本テニス協会マナーキッズテニスプロジェクトが、文部科学省、NHK、読売新聞社の後援、小笠原流礼法鈴木万亀子総師範の協力、各企業の協賛を得てスタートした。

爾来四十二都道府県において、三百六十回開催し、

教育・普及事業などを継続的に展開している。具体的には、スポーツ・文化など子供たちの各種活動を通じて、日本の伝統的な礼法を体験させることで、挨拶、礼儀作法などのマナーを習得する。

子供は、教えると変わることが出来る、礼儀正しさのDNAはまだ残っていると確信している。

二 日本の伝統的な礼法から学ぶ

成果をあげている理由は、スポーツと日本の伝統的な礼法とのコラボレーションにあると考えている。スポーツ団体だけで、いくら努力してもこのような成果は得られなかったと考えている。

今の日本の教育現場は、戦後、アメリカの教育理論を取り入れ、先生、生徒は対等、仲良くしましょうという路線で教育しているようである。家庭においても目上、目下がなく、お友達のような関係になっている。そういう関係では「躰」は出来ないと思う。

マナーキッズ教室では、目下の生徒が目上の指導者に姿勢を正してきちんと挨拶することを教える。やはり、伝統の重みが子供達の心に響くのではないかと思

う。また、子供は、スポーツをやりながら楽しみながら学ぶことで自然に正しい挨拶が出来るようになるかと考えている。

三どのように育てたらよいのか

(1) 指導の実際

① 小笠原流礼法鈴木万亀子総師範による正しいお辞儀、挨拶の指導

マナーキッズ教室の内容は、初めに生徒に自己紹介をしてもらう。全国どこでもそうだが、姿勢は悪く、小さい声で自己紹介する。その後、小笠原流礼法鈴木万亀子総師範が正しいお辞儀・挨拶の仕方のご指導がある。姿勢を正して、お腹に力を入れて、胸にいっぱい空気を入れて、「よろしくお願ひします」と言うてからお辞儀をする。

お辞儀は、頭を下げるのではなく、腰を折って、心を下げる。お辞儀が終わったら、やさしい顔で相手の顔を見る。これを「残心」という。指導してもらったら、同様な方法で「ありがとうございます」を言う

てからお辞儀をする。

② 挨拶の反復練習

シヨートテニスをやりながら二時限(九十分)の間、「よろしくお願ひします」「ありがとうございます」と繰り返し「あいさつ」の練習を行う。子供は十分ごとに、姿勢がよくなり、声も大きくなり、変化していく。

③ 目標設定と挑戦

ラリーが何球続けられるかという練習では、初めは達成可能な目標をコートごとに設定し、達成するとコートと握手し、報告させる。後は、個人ごとに目標を自己申告させ、達成すればまた、握手し報告させる。自分で目標を設定しているので、挑戦意識が強くなり、目の色を変えて取り組む。

④ 全員で雑巾がけ

マナーキッズ教室が終わると、全員で体育館の雑巾がけをする。雑巾を競争するように、取りに行き、喜々として雑巾がけをする。子供の心に何か変化が起こっているのではないかと思う。

⑤ 修了証書の授与

今の子供は、相手の目を見て、お礼をいうことが出来ないことから、修了証書を授与している。賞状の受取り方を教え、しっかり相手の目を見て「ありがとうございます」と言わせ、いい顔で握手をすることを教える。

⑥ 指導者全員にお礼の挨拶

最後に、マナーキッズ教室の集大成の意味あいから、一人ずつ、指導者一人一人に、きちんと、立って、きちんとお辞儀をして、「ありがとうございます」と言いつて、握手する。

指導者も、本日の子どもの変化を目の当たりにして疲れが吹っ飛ぶ瞬間である。

⑦ 感想文の提出

マナーキッズ教室では、感想文をその日のうちに、提出させる。スポーツで疲れた後も、本を読む、勉強する習慣を小さい時から身につけてもらうためである。テーマは小泉信三先生(元慶応義塾大学塾長)の「スポーツ三つの宝」他である。

第一の宝は、練習または錬磨の体験Ⅱ不可能を可能

にするものは練習だという体験Ⅱを持つこと。

第二の宝は、フェアプレーの精神。

第三の宝は、友は人生の宝。

という内容である。子供は、心に響くところがあるようで、しっかり書いてくる。

⑧ 保護者への講話

【鈴木総師範の講話「家庭内の躰」】

マナーキッズ教室では、子供がプレーしている間に、保護者に対して小笠原流礼法鈴木万亀子総師範の講話がある。

まず、「朝起きて、誰が一番先に声をかけますか」という質問を親にされる。

ほとんどの場合、お母さんが「○○ちゃんおはよう、すぐに○○を用意しなさい」と言う。そうではなくて、挨拶というのは、目下から目上にするものですから、子供から「おはようございます」と敬語で言わせなさい。お母さんは、小さいお子さんであれば、料理等の仕事は止めて、子供の顔を見て、「おはよう」で返したいものである。「朝に見て、昼には呼びびて、夜触れて確かめおかねば、子は消ゆるもの」と昔の人は言っていたとのことである。まず、朝は子供の顔を見て、

調子を点検する必要があるという話をされる。

次に、「食卓では、子供の髪をさわらないこと」という話をされる。今、電車の中で、食事や化粧等をする風景が当たり前のようになってきているが、公的な空間と私的な空間の区別がつかなくなっている原因も、そういうところにあるようである。

また、子供を叱る際には、親は上座、子供は下座ですれば効果があがるようである。子供にとって母親は愛情、父親は尊敬の対象になるわけであるから、「夫



お辞儀・挨拶の仕方指導



「よろしくお願いします」「ありがとうございました」と繰り返し挨拶

の悪口は言わないで。遅いわね、何をしているのかしら」と言うなら、「お父さん大変ね。こんなに遅くまで。私ならこんなに遅くまで働けないわ」と冒頭に言葉を添えて下さい。母の唇からは、美しい言葉以外発しない、と決心なさって下さい。そうすれば子供は父親を尊敬するようになります」という話もされる。

(2) 成果と課題

① 成果

昨年六月にNPO法人を設立してからは、極力、小学校体育授業に道徳(食事のマナー他)を組み合わせるようにしている。その第一号の青森県八戸市立新井田小学校から、次のような成果が報告されている。

イ 授業の後、教師の意識・指導が変わった

・子供の様子を見てすぐ叱るのではなく、「マナーはどうか?」「迷惑をかけていないかな?」と、キーワードを子供に投げかけ、考えさせるようになった。

・自分自身も、「子供の前できちんとした振る舞いをしなくては」と、意識するよ

うになった。

・全校生徒が、鈴木総師範のお話を聞いたので、全校一貫した指導ができるようになった。「鈴木先生に教えて頂いた立ち方をしてごらん」というだけで、六百三十八人の子供達が、凛とした姿で立てるようになった。

・子供をほめる場面が増えた。学級内にプラスのサイクルが増えた。

・マナーという視点で、子供を見つめ直すだけで、生活面、学習面の全ての領域を網羅することが分かった。そして、その波及効果も大きい。

□ 子供の意識が変わった。そして行動として表現できるようになった

・授業の始まりと終わりの挨拶では、教師の目を見て挨拶ができるようになった。

・朝食をしっかりと食べるようになった。

・地域や校内ですれ違う時の挨拶がとてもよい状態になった。

・明るい顔、場にあった声・腰の折り方等、本当によくなった。



雑巾がけは全員で



修了証書授与

② 課題

マナーキッズ教室を小学校体育授業において全国で初めて採用した、東京都杉並区立三谷小学校大竹久江校長(当時)は、「私が『おはようございます』と呼びかけても子供達はほとんど目を合わせません。声が聞こえません。笑顔で返してくれる子供はあまりいません」と、マナーキッズ教室採用の動機を話しておられた。マナーキッズ教室を全校生徒が受講した結果、子供の「以前から挨拶をしている」割合は、平均で三六

%であったが、「よくするようになった」「少しするようになった」という挨拶の質が向上した子供の割合は、平均五四%と合計で九〇%に達したという成果が報告されている。

従って、マナーキッズ教室が全国各地の小学校に体育・道徳関連授業として広がれば、子供のマナーは飛躍的に向上すると確信する。しかし、まだ「点」での展開であり、「線」「面」の展開にする必要があるが、それを実現するには次のような課題がある。

イ 資金面の確保

当法人の運営は、正会員・賛助会員の会費及び法人・個人からの協賛金、寄付金により、全てを賄っているが、開催の対象が増えた場合、いかに資金を確保するか。本プロジェクトの趣旨にご賛同いただける法人・個人の更なるご支援と行政の新たなご支援を切望する。

ロ 指導者の確保

地元指導者は、大学OB会、地元クラブ他、すべてボランティア活動に頼っているが、今後、更なる需要増に対応して指導者を如何に確保するか。

小学校の体育・道徳関連授業はウィークデーに開催されるので、リタイアされた方々の指導者として

のご参画を切望する。

ハ 受け入れ先

日本のどこの小学校においても、不審者の校内侵入による暴力事件から、見知らぬ人には挨拶をしないように指導しているとのことである。そうすると、子供は俯き加減うつむに歩くようになる。そうではなくて、町中の人々が挨拶することで、子供が胸を張って歩けるようにしたいものである。私達の試みが全国に広がるよう注力したい。そして、数十年後に、「マナーキッズ」という言葉が必要でなくなるようになればと思う。

最後に「マナーコミュニティ」で商標登録を取得した。学校、家庭、地域社会あげて「子供の変化」が持続する仕組み作りを模索したい。

参考文献

- 「NPO法人マナーキッズプロジェクトについて」二〇〇七年
- 「マナーキッズフォーラム報告書」二〇〇八年

類似実践

- 財団法人日本テニス教会マナーキッズ®テニスプロジェクト
<http://www.jta-tennis.or.jp/kidstennis/>